迷惑をかけたくない話

　患者さんが語る切実な想いの中に「家族に迷惑をかけたくない」というものがあります。病状が進みますと、今まで難なく自分で出来ていた身の回りの世話から排泄に至るまで、人の手を借りなくては済ませられないことが多くなるのが普通です。自分のことくらい自分でやるのが当たり前、というお気持ちで自らを律している人も多いでしょう。自分に厳しい人ほど、それができない自分の姿を想像さえしたくないのかもしれません。なにせ、人に迷惑をかけるくらいなら「早く死にたい」と言い出す人までいらっしゃるくらいです。

　また、身体的な世話と同時に、経済的負担という現実も無視できないところでありましょう。働かざる者食うべからず、というやつです。そのような価値観から見ると、これから私が始めるようなお話は、いかにもあまちゃんに聞こえるかもしれません。さらに、患者さんとご家族の関係は、それまでの長い歴史の積み重ねであって一筋縄ではありません。素直に気持ちを口に出せなかったり、憎しみや強いわだかまりを抱えていたりもするでしょう。それはそうでしょうが、ここはひとつ「迷惑」の中身について考えてみるのもいいかもしれません。

　そもそも赤ちゃんは、うんちもおしっこも出し放題、おなかがすいたら泣くばかりですし、少しもお金を稼ぎませんが、誰もそれを（少なくとも表向きは）迷惑だとは言いません。なのに、いい大人が病を得て不自由になったらその世話が迷惑だとは、それこそ割に合わないことではないでしょうか。自分で出来ないことをひとに頼んでなんの悪いことがありましょう。たしかに大人は赤ちゃんと違っておおむね可愛くないし、将来大物になる期待もないですけど、そこは年の功というのがあります。いいえ、そんな理屈よりも、「ああ、私は家族に迷惑をかけている、こんなことなら死んでしまいたい。こんな役立たずな私には何もしてくれるな」と陰気なパワーをふりまかれるよりは、「ありがとう、ありがとう」と、できれば笑顔で受け入れてくれたほうが、世話する側の気持ちはどんなにか救われるだろうと思いますよ。どの道放っては置けないのですもの。

　身の回りのお世話というのは口で言うほど簡単ではありません。とくに自分で力を入れられない人体を移動させるのは、自ら吸い付くように抱っこしてくる健康な子供を抱き上げるのとはわけが違います。そして、それぞれの動作には大変気も遣います。正直大変かと聞かれて全否定は難しいかもしれません。でも、不思議なものでひとは誰かの役に立っていることで自分の存在や価値を確認している面が必ずあります。それはお世話する人だけでなく、される側の方だってそうです。世話になることは自分の価値を失うことではないのです。家族でない私たちも同じです。

もちろん、これが仕事なのでお給料がいただける、という面はありますが、支えの必要な人を今自分が支えているのだ、という感覚は、お金以上に価値のあるものです。なので、「世話をさせてやってる」と言ったら言い過ぎかもしれないが、かといって一方的に迷惑ということはないと思った方がいいです。そういう私も、明日は我が身なのですから。